

# AIと子育てとロボットと

ながれ

末次 聡子 (すえつぐ さとこ / 京都市左京区 主婦)

「2050年にはヒト型ロボットの累積普及台数は10億台を超える」そんな新聞の見出しに、わくわくと未知への不安を覚えたのは、私だけではないだろう。カズオ・イシグロが「クララとお日さま」で描いたような、一般家庭にヒト型ロボットが1台という時代は近い将来、やって来るだろうか。

私は既に自分の知らないうちにAIに頼る生活に漬かっている。ありふれた情報の多くは、アルゴリズムで誘導されたコンテンツがほとんどだ。勤め先の20代の同僚は「AIを育てている」という。この「育てる」という表現は赤子にミルクを飲ませたり、ペットに食べ物を与えたりと、その成長と生活を見守る行為ではない。ChatGPTのような対話型AIの回答が自分の期待した内容に添うよう導く行為だ。例えば、対話の回答が意に沿わない場合、自分の思い通りの回答がでてるまで質問の文言を変えたり条件設定を変更したりするなどしてAIを学習させる。あくまでベクトルの向きは自分自身だ。

一方で、人間の子育ての話である。7月中旬、街中が国政選挙に沸き立つ中、中学3年と1年の息子たちの2人が突然同時に反抗期に入った。私は次のフェイズに移った子育てに、強い衝撃を受けた。そもそも反抗期という用語は学術的には存在せず、大人が思春期の子供の成長を受け入れられない状況を説明する際に、その利便性から一般的に使われているという側面があるという。

それでは子供の反抗期に親は、どのようにあるべきか。ある育児書に書かれていた心理学者エルナ・フルマンの論文のタイトルは、「Mothers Have to Be There to Be Left(母親は

ただ去られるためだけにそこにいなければならない)」と衝撃的だ。発達の段階で、親は「去られるがいつでも戻ってこられる安全地帯」であるべきと書かれていた。これはなかなかハードルが高い。子育てのベクトルは、自分自身の外に向けられなければならないということだろう。

人間の子育ても、今後AIがますます浸透してくるかもしれない。世の中に普及しつつあるもう一つの「育てる」が、本来の人間が行ってきた「育てる」の行為を凌駕することはないのだろうか。子育てがAI任せになる日がくるかもしれない。

中学3年の長男は、幼い頃からロボットに関心が強く、将来はロボット開発の仕事に従事することを希望している。きっかけは、小学生低学年のころ、家事に奮闘する母親の役に立つロボットを作りたいと思ったからという。私はこれまで様々な困難を乗り越えてきた長男を、「この子はなんとかするだろう」と信頼している。AIと人間とロボットの良い関係性を築いていってほしい。あっ、その考えもまた自分自身にベクトルがむけられているかもしれない。



今年4月中学校初日の写真。小4の妹も一緒に